

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024.10



令和6年10月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第10号 No.797

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二四年 一〇月号 (通巻七九七号)

◇今月の二十首詠……コスラーへ

福田庸子 2

■作品

梅本武義・大浪美雪他

A 脇田智子他 18

B 石田和子他 42

C 池上久代他 54

A 佐藤昌他 66

■オリープ集

平尾はるみ・福光敬子他 32

◇今月の二人

平山一子・中山誠 14

私と短歌との出会い (266)

定金崇恵 17

■〈第一歌集を眺む〉19

山下雅子歌集『陽光』

―不屈の理解によって―

六戸千佳子 28

◇シルクロード・カフェ

【責任編集】

木村文子 38

■鑑賞・三好直太の歌 15

〈鹿〉

久我田鶴子 40

■遊覧寄港〈短歌とお茶と〉

松平正守 30

■歌壇月旦

第一歌集への二つの賞

楢垣美保子 31

■八月号作品批評

A……奥田陽子・大浪美雪

深井喜久代・さとうちえこ

B……酒井牧・甲田啓子

C……上林節江

オリープ集……永田進一 58

今月の二人・作品評

久我田鶴子 16

最近の歌誌より

【編集部】 41

報告・湾の会第一回吟行会

上林節江 53

通巻八〇〇号、メッセージ募集

78

クリップ……77

神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

ゴスラーへ

福田 庸子

水平飛行一斉に寝入るしじまありこのみ平和北極上空

プーチンもネタニヤフも異人種を根絶やしにする野望を持ってど

高度一万メートル二百人の眠りに交じるをさな児の寝言

茜空暮れざる夜を飛び交へるヨーロッパアマツバメ羽太くあり

屋根裏に木組み残せる義姉の家ハウハウゼンはしづかなる村

百年前の農家の間取りそのままに木組みの柱みがかれてあり

やうやくに日の暮るる刻二十三時丘に大きく虹の橋立つ

ゴスラーは銀山の街千年を支へし家並みは中世をまとふ

昭和二十四年生まれ。
昭和四十五年地中海入社。
遼空門の東籬男に師事。
歌集に「木馬路」がある。
今市支社長。

なだらかな山裾に並む家の街木組みのつくりあざやかにして
居城なる丘にし立てば教会の尖塔あまた街を守れり

野を占めて染むるポピーによみがへる晶子の歌の色なつかしき
ゆるやかに牧草地とポピーの続く丘ドイツ鉄道に心ほぐるる
丘に沿ひ走る鉄路に見放くればプロッケン山なだらかなりし
風力発電にあまたの柱並び立つ牧草地の上を稜線として

子も犬も寝そべるままに聞きゆるライプツィヒの野外劇場
おほらかに膝をのぼして飲食もゲヴァントハウスの演奏続く
蚊は居らず乾きたる街夜八時歩幅ゆるゆる市民の帰る

人口の一割を担ふ移民達ドイツの暮らしを支へゆくなり

石畳に設けしテラスにとる夕餉インド系青年は手極良く盛る
数年後の日本の姿に重なれり街にとけゆくヒジャブの女性ら

作品 A

梅本 武義

今我

・羊

日影見て昼を覚りし畑なりき今は疲れが先立ち帰る
 昨年よりも長靴重くなりており杖をつき行く梅雨の散策
 金婚も喜寿も傘寿も無視されぬ米寿までは生きて遣らねば
 陸橋を渡り改札出る時は最後尾となる今の我かな
 坂道に休む椅子置きはや四年八十路越したり夕鯉を聞く
 宴席は聞き役が良し盛り上がりゆくほど思わぬ情報に合う
 「丸くなれ」言われし日々よなあなあの体制批判に思うその頃

大浪 美雪

夏至

・森

夕ぐれのながきは嬉し何もせず何も思はず空を仰ぎぬ
 溝川を覗くに昨日は小さき亀今日は蟹めてはさみを翳す
 店頭に音たて動くサハガニを「天麩羅にまたベットにどうぞ」
 雀の嘴逃れしは何カメムシか仰向けなるを漬しゆきたり
 梅雨冷えぬか床ぬくし大根に胡瓜人參深深ねかず
 外からは見えぬものもつ獅子唐のロシアブルーレット辛さに当たる
 雲の底高さを揃へ浮かびたる白きものまた薄墨色の

奥田 陽子

霧雨

・羊

折おりの花うつくしき庭先に病む老いびとを初めて見たり
 病む人は眠りてあらん日のひかり穏しき庭を見つつ過ぎたり
 穏やかにあるもこの時ばかりかど霧雨の朝いでて歩めり
 木も草もつつみつつ降る霧雨に隠れてしまふ身を運びゆく
 物けふる雨となりたり何をまた捉えんとして伸べしわが手か
 〈本を捨てる〉そんな話をつづけざま聞くべくなりぬ夕べとなりぬ
 いちばんに捨てられてゆく本という物の運命（おんめい）をひと夜おもえる

小野 雅子

リニュージュ

・羊

身長を「サイズ」と言ひて小柄なるバスケット選手バリへと向かふ
 空中に時間をつくり制止する鉄棒選手の赤いユニフォーム
 「たつき」でなく「リニュージュ」と読むといふ柔道メダリストの名
 「ワタガシ」と名をつけられて渡辺と東野で獲るテニスのメダル
 無駄な音はひとつもない管オーケストラのピアノシモなる音色を想ふ
 ただ一度打楽器を打つためにずつとステージ上にある人
 次々に指揮者は登場するけれどやつぱりレオポルド・ストコフスキー

磯田ひさ子

あさがほ

・森

上林節江

茂吉を慕い

・海

ぼつくりのやうな厚底サンダルがパブル期を経てふたたび流行る身を縛る何ものでもなし数領の桂きざし重ねし十二の御衣みんぎ一枚つづ衣を脱ぎて身を軽くしたる歴史か女性の権利縛らるることなく励め若きは思ひのままに生きて輝けみづからの心を疊み生き来しが夏の陽射しがただにまぶしもまつ白な綿のブラウス陽を反すわたしがわたしを取り戻しゆく誰ぞゐるけはひ涼ふ水色のゑのぐ溶きたるやうなあさがほ

市原やよひ

遠花火

・萬

戦争に征きて帰らぬ叔父二人母と並びて日の丸を持つ末の叔父最後に会いしは夏服の詰襟着ていた坊主頭に永遠に若き姿のままの叔父語ることなしその後の母歪みたる車次次通り過ぐゆくりなく見ている車庫の屋根陽炎のような人影作り出す車庫の屋根は悪戯が好き狂いたる夏過ぎ行くをただに待つ己れ狂わぬ中にと願いつ界すぎる夏に閉じ込められる日日夜夜をかすかに遠花火聞く

神田鈴子

花水木

・大

あるし逝き住む人のなき隣家に去年と爰はらず花水木咲く香りたつ新茶を夫の使ひゐし湯呑みに供ふる七夕の夜高校のランチお披露目に孫と行き調理の味に心満たさるうすグレーにピンクあしらふ校舎並び夢の国かと戸惑ふばかり「過ぎたるは」の思ひ試へず天井にシャンテリア光るトイレに見入る冬瓜のうすきみどりの冷やし汁涼をいただく夏の夕べに梅雨明けを待ちかねたるか朝まだき柳の木より蝉しぐれ降る

菊地栄子

シルクロード展

・海

夢でなしツアーにておとないシルクロード仏教の道明確なしぬ気温四〇度ベットホテルを買いそこね巡る遺跡は恐怖にありし模写されし莫高窟の仏群 ポプラ並木もそよぎておらん頬赤き囲碁する婦人の屏風の図匂うばかりに華やきにけり頭部のみの如來のみ顔違わずに目元口許微笑みたまう陶製の五センチほどの蚤なりシルクロード展納得しゆくシルクロード展巡り来て再び鑑賞す平和なればの恵み気づかず

草刈十郎

梅雨

・世

生くることの辛さ傍さ示すがなめくちひと夜の軌跡を残すふれあひのなきま物買ふ世の中に入らますます愚に返るなりかび臭き古書の匂ひの漂ひて九州北部けふ梅雨に入る足腰の弱りし故か立ち上がるときに自然に「よいしょ」の聲が蟻のむくる蟻運びゆき踏まれても変へざる進路戦地めくなり廃校の時計の今も動きをりあとといくばくの命ならむや戦争をしてはならぬといひながら武器売る国のあるを悲しむ

河野繁子

山法師

・雁

ふわふわと螢出始め日常はひとりの自由ひとりの不便
何事もなかったように季くれば螢川辺に舞うて一年
Eテレの日曜美術館見るはずが覚めし画面に将棋さしおり
ふたたびの命戴きまぼろしの野をゆくひとの面会にゆく
あしたまた来るねといえ病院に「泊まれば良い」と答え簡単
骨とかわ足のたために顔みれば「さあ帰ろう」と家を恋うひと
電線にふれないように枝を切り幹大木のが山法師

小林能子

ともかくも

・羊

2024年春夏流行にアース・カラーの土埃色復活す
ものごころつきし頃よりカーキ色もちひて描きぬ「兵隊さんの服」
軍服の父に面会 手を握り頷くばかり六歳のわれ
兵学校の制服姿米軍放出シャツ姿ありて戦後のキャンパス
若者にファッションと映る迷彩服やつと手に入りし平和な日本に
平和ボケの務りともかくも誇らしき「非核三原則」守りこし日本
カーキ色を軍隊風カキカと謂ふ勿れわたしに身近な枯草の色

近藤栄昭

秋

・虹

ザクザクと山道埋めるとんぐりの丸みを潰す避け得ぬ足は
サナズラが秋田に残りお土産と照りの葉陰に粉吹きこなの紺
山の実のみのりを量る秋彼岸あきり落ちいるか草むらに光り
数珠グリをおやつにひと下げ頂いて飛び出し遊びほうける秋は
剣きづらい小さな柴栗しば疲れくる大実の銀寄ぎんぎうらやみている
秋彼岸あき終わってだんごは甘辛に底辺の垂れたれを最後にすくう
ことし冬こたつのおやつは実り願残る干し芋尻尾がしわい

近藤芳仙

追憶

・信

朝霧のモンサンミシェルは海の上 遠く見て佇つ古稀の日のあり
セーヌ川の水面はるかに流れゆく客船を見し後の酔けさ
フランスのムーランルージュの赤き灯を夢に見てをり十年の後に
壁に貼るカルカッソヌのタペストリー若き日我も城壁をめぐらす
ベネチアの移動は全て水の上とつぷりと我が心も満ちて
パチカンもフォロローマーンも現実のことなり未だ夢のごとしよ
英仏をユーロスターに渡りたり地球の国は斯くつらなれり

坂上直美

悼松谷公汪氏

・天

梅雨いまだ来ぬとう今日も空暗れて白きTシャツ洗って干しぬ
梅雨に入り重き知らせを受け取りぬ松谷公汪氏急逝すとう
君を惜しみ雨降りやまぬ吉野山鶴のかかりて見えぬ姿よ
君が魂吉野の山に入りぬらん来る年の花いかに匂く
冥界に大海人の皇子と訴れかし吉野山人松谷の大人
心には兄と慕いし松谷氏優しかりしよ厳しかりしよ
妹のたどたと歩む歌の道見守りたまえ導きたまえ

坂出裕子

桔梗

・洛

庭の辺に桔梗一輪咲きしこと今日のはじめのしあはせとして
むらさきのやさしき色にふみつきふみの熱暑の朝を桔梗ゆれをり
むらさきに揺るる桔梗にひとときの涼をいたたく暑さ忘れて
文月の酷暑の朝をむらさきのやさしき花にこころ安らぐ
としどしに咲く花なれどむらさきの色あたらしき朝の窓辺に
いつまでも夏でないよと涼し気に揺るる桔梗にやさしさを得て
むらさきの色うつくしく神様の賜へる幸とふとも思へる

佐藤道子 異変 甲

七月に秋の青空澄み渡り際やかに見ゆ浅間の山が
山頂まで雲一つ無き浅間山小さく輝く真夏日のもと
雲まとひ見ること少なき山なりし夏の浅間が今日も輝く
どんぐりの芽生え抜き居りそのままに置けば我が家はどんぐり林
どんぐりを穴に貯へ居りし栗鼠今年は食へて食へて持て余すらし
何十本抜いても抜いても目に付きぬどんぐりどんぐり今年の団栗
ダブル高気圧日本掩へば高原も熱中症注意のアラートが鳴る

篠原まり子 今更に 羊

温暖化越えて沸騰化今ははやうちわ打ち水日を遠くして
望月は言わず語らず熱帯夜気温上昇いつまで続く
窓に見る低き空より視界なく線状降水帯の危機迫る
ねじ花のひとつ一本背きたるねじれぬままに花を付けおり
三つ四つ垣根にしほむ夕顔はしるじろとして物語なす
朝明けのラジオに流れ来「愛の賛歌」パリオリンピック開幕の日
父はは語らずなりき今更に「満州建国の大義」読み継ぐ

柴田登志恵 風の気配 天

くちなはの衣の横切る石垣が朝の光に発熱しはじむ
呪術ともアンガークントロールとも無縁くちなは黙し遊歩道ゆく
くちなはは流沙の上をゆく形モザイク模様の舗道を滑る
夏草をくぐりて進むくちなはの幽かな音に大気青めく
問ひもなく答へも持たぬくちなはの尾のひらきゆく透明な界
踏み跡のつづく森奥うす青の風の気配にいのち息づく
頭掲げ音なくすすむくちなはの後ろ姿の両性具有

鈴木結志 白萩 福

観ることは為^{して}手の秘むる幽玄か拝み観音白萩の花
短歌を詠む「科学者たちの本」を手におのが詩積みの絶品とする
うたの序に四端をつかむ語彙さぐる永存満たす生きのならわし
一途とは生きの指針のはなむけと一字一画書の枝をねる
表現は無情なほどの自在なり詩をクッションに増さるさを増す
自らに勝つことこそが勝利という言の葉信じふでひたにとる
十返舎一九の道中膝栗毛弥次喜多の失敗腹をくすぐる

関根榮子 柚子 崎

拾い上ぐる手のひらにはや香りおり指先ほどの青き柚子の実
生りすぎし実を自らに落とす柚子残る実はまた選ばれし実か
気味悪くからみ垂れいる蛇瓜を主^{まも}はいかに食すか知らず
この夏の道行く人を驚かす蛇瓜の棚を見ているわれも
パラソルが雨傘になりほっとするにわか雨来て道を急げり
丈高くひとむら茂りしやぶ若荷花咲けば真白く消々として
猛暑ゆえ不用不急の外出はやめよとぞコロナの日々かえりくる

関根和美 古河の巡礼 崎

なつかしき師の名に触れるひとのあり梅雨のあいまの巡礼のみち
暗れ女と自称の連れいてわずかにも日の射しきたる殉教の地に
うしろ手の捕縛者あまたありありと細き幹寄せ大腹たつ
「日光へつづくこの道神君のお通り 穢しき者らは失せよ」
金堀谷のちに呼ばれる馬捨て場そこに葬られし牛馬のごとく
四百年まえのできごと語られず知らせず建て売り住宅せまる
はるかにものぞむは旧の谷中村キリシタン墓碑のここにもありて

高尾 恭子

風の終章

・大

やさしさが無い物ねだりになって散るペアマグカップのブルーの欠片
遠すぎるあなたが近い銀色の小箱に仕舞うマリッジリング
喧嘩して仲直りして行儀よく外されているふたつの指輪
誤差ほどの死者のひとりに教えられステージⅣの風の終章
よく通る僧の続経が遠ざかる白菊ゆらす風にみだれて
人生のいいとこ取りして先立ったあなたの写真を泣かせてみたい
八つ当たりできる人なく雑巾をしぼる夕暮れ涙をながす

高津砂 千子

入院

・風

たんぽぽのクッキーぼりぼりかじりつつ午前三時の夜寝みている
林立すマンション出入りの人見えず煌煌とただ光るのみなり
何百の人の住まうマンションをぐるり見たす音のなき夜
四階の病室までも聞こえる蝉しぐれあり今日も酷暑か
まむかひの黄金山のなつかしき親子で登りしは半世紀前
新しき友は二十も若かりきされとメールの交換なすも
一階の外まで投函しにいくを運動なりと言いきかせおり

滝 田 靖 子

リアル

・新

この夏を説き継ぐ『ペリリユー 楽園のゲルニカ』最前戦のリアル
玉砕も散華も美しい言葉事実も真実も 嘘ばつかり
読んで泣き泣いては読んでいつかうに読み終はらない一冊のあり
泣きながら漫画読んでる真昼間を宅配便のお兄さんが来る
泣き腫らす目に気付きしか幾たびも首振りながら戻り行きたり
戦争を知らずに育つ日本に戦争を知らないままに老いゆく
湿度さへ思ひ通りのエアコンの下に昼寝の令和のリアル

田 土 成 彦

北ヤード

・宙

大阪と言へばたこ焼きと返りくる自虐史観のやうな反応
エアコンのスイッチ切ればおもむろに横式のやうに蓋閉ちてゆく
東京はたつた四百年の街浪速はそれより千年古
北ヤード開発に知る墓地の跡ネオンにあらぬ人魂のとぶ
淀屋は人道頓はんとくらぶれば松下はんは少し小さい
現世はあるいは幻かもしれぬUFOも飛びU.M.Aも走れ
この路地をくぐりぬければ夕風の海は今生の光にあふる

田 土 才 恵

尾瀬残照

・宙

振り向けば白雪残る山肌に別れを告げて鳩待峠へ
生涯に一度で良しと言う願い叶えば明るしわれの残生
雨避けて終わりし山旅みずからに大きひとつの幸運と告げ
ふと見せしその横顔に風格の蓄えて来し体験を知る
深呼吸生きの証に尾瀬が原の空気がいっばいわが胸に吸う
大方はうつむき歩く一日にふと見上げている燧ヶ岳を
振り向けば雪の白きが残りいる至仏山いつまでも心にとどめ

玉 井 綾 子

技術

・羊

中学の授業参観にはんだごて見て悪い出すあの手の震え
昭和には技術家庭科は男女別課程でひとつの成績付きぬ
家庭科は女子で男子は技術だと無意識のまま差別されおり
女子高に通えば技術の授業なく日曜大工をする友もいす
昭和にも習ったはずのボタン付け夫は未だに出来ないらしい
情報処理の課程加わり親たちの「技術」教師を見る目変わりぬ
金工室・木工室ある中学校 社会人への扉を創る

永田進一　　パリ五輪

・山

中村博子　　大原の里

・澁

記録的短時間大雨情報は実に明快　雨後の筈

正装の新札紙幣威儀正しおさらばするや諭吉先生

保険屋も銀行員も瑣末までこだわり貫く守銭奴の性

大相撲手脚にべたべた貼りつけて横綱もっと美しくあれ

セーヌ川会場にしてパリ五輪涼みがてらの野外祭典

エッフェル塔登えて見守る五輪なれテロの危険にダイヤの乱れ

人はみな生きている証求めるや克己心もまたそのひとつならむ

永塚節子　　波の音

・銀

西堤啓子　　ミネラルウォーター

・天

聞こゆるは波音ばかり夜の海を静かに照らす十六夜の月

昨夜に見しは曳航さるる船ならん大島を背に動く気配なし

寄する波引きゆく波にかすかなる目眩を覚え汀離れぬ

見の限り続く海原波の音ハイビスカスの赤花ゆれて

計算をなさぬ不安にかられつつ開き直りてしゃぶしゃぶを食む

遠き日のゆりかごならん絶え間なき波の音にこの身を預く

くりかえし寄する波音いつの日か途絶ゆる時のありやなしや

仲西正子　　芍薬の花

・沖

浜谷久子　　春夏秋冬

・地

待ちまてる大粒の雨コンクリートをたたきてすぐに海へと走る

十日越しの夜雨を願ひ耕して植えて食むことわれ小市民

側溝にへばり付きたるオオタニワタリ日照りに負けず流されもせず

測溝の蓋つき抜けて背棄する生き方上手なオオタニワタリ

芍薬の花束抱え訪いくれいいつも多忙と言う友なれど

芍薬の固き蕾は指先に触るればやがて開くとぞ知る

紫の八重の芍薬ひらきたり今朝は一輪つぼみは七つ

啓子さんと京都駅から大原へ市バスに揺られとろとろ走る

猛暑ゆえ寂光院まで行き得ず以後戻りの道に河鹿の声す

ボンヤリと暮らして来たる道すがら河鹿を蛙と知りたる大原

やや盛り過ぎたる合飲の花なれど色の優しさまなこに残る

真っ青な空に間近く山のみどり赤紫蘇の絨毯広がる窓辺

誘われ土井の柴漬け本店にランチお喋りに時過ぎ去りぬ

啓子さんと満員バスを降り立ちて出町柳にそれぞれの船路

戻り来し若隆景の艶めいて広目天のちから波打つ

横たわる猫は暑さを言わぬまま広がるミネラルウォーターである

不条理の森を探りて迷い行く慣れてはならぬ冒険として

壊死した細胞は帰ってこないから予定調和のムスメフサホセ

流されてまた流されて返らない言葉はいつも湧へと下る

山川におもかけを追う歌枕ころを放ち空にあこがれ

南アより来たるランタナ炎熱に蝶を招いて欲び煮る

役目終える手持ち無沙汰を知らずして隣人たちの声が訪う

それぞれの時代を生きてともに老い病む日は静かに見守る近隣

年月に残る気負わぬ付き合いは素顔が行き交う日目の暮らしの

ひとり住む人の親身の世話になり子らは福省の挨拶かかさず

五十年ちかくを馴染む近隣の春夏秋冬温かくあり

美容院の振る舞いコーヒー味わいつつ週刊誌のレシビ頭に入れる

工夫手間かける新作献立もべろりと消える何こともなく

檜垣美保子

雨脚

・昂

未熟とはいまに恥ずかし五十年前の記憶に赤滲みくる
 三十三回忌すぎれど遠くもおもわれず弔電の束まだ色あせず
 雨の日の午後に雨脚みてあれば「生きていれば」と亡き夫の歳
 ふりしきる雨の小暗き木下開枯れあじさいの打たれつづけて
 夏咲きの椿というを買ひもとめ鉢から庭に植えかえる夏
 とさおりはあずきと稲米 祝い事なけれと今日は赤飯もらう
 南天の葉のかたちよく添えられて友の赤飯ほのかに温し

福田庸子

こぼれ種

・今

少子化は話題にならず校庭に熊出役の我が母校あり
 一年間手入れ怠る菜園のめぐり被ひて荒草の丈
 茅原なる明日とも思ひつつ母と育てし菜園に立つ
 滑り草・小二色草の這ふ土を再び起こす秋を得んため
 庭隅を冒し始めし笹の根を切りゆく朝山風止まる
 高温と多湿に伸びる笹竹を引き抜く力まだ我にあり
 こぼれ種野生に育つ味はひの深さを知らずミニトマト盛る

藤田美智子

黒揚羽

・新

食べたきもの聞きしを深く悔やみたり間に合はぬまま君を逝かせて
 梅雨明けぬ日に確かなものとなるこの世にはもう君の亡きこと
 黒揚羽しきりに羽を動かせり逝かんとするもの呼び戻すこと
 涙の出ぬこの悲しみは何だらうカサブランカを棺に入れぬ
 梅雨明けぬ日に確かなものとなるこの世にはもう君の亡きこと
 交はらぬまま君在りし日の苦しさともう会ふことのなき悲しみと
 在りし日より君への思ひ増しゆきて涙は胸の奥にたまれり

藤森巳行

百日紅

・銀

この暑き子供の頃はなかつたと公園の木陰アイスクリーム食む
 この夏の暑さに負けず三首詠む我は八十短歌忘れず
 今日の日を生きた感謝に両の手を合はせ明日に命を繋ぐ
 百日紅雷雨に打たれ五つ六つ鋪道に紅色散らしてをりぬ
 振り仰ぐ真夏の空に百日紅くれなるの花涼と咲くなり
 武蔵野線ギャンブル線か新聞を片手に予想の人とよく会ふ
 耳少し遠くなりたる妻がゐる会話も自然に少なくなりたり

本元由美子

八月の空

・岡

産土の葉月朔日神詣で柏手の音真青な空に
 この国の長き戦争の終はりし月 朔日詣での空青くして
 平和への願ひを繋ぐ人とならむ終戦の八月に生れし我ゆゑ
 高原の八月の空抜け渡りはるか昔のわれと手をつなぐ
 故郷の暮山に来て仰ぎ見る八月の空に母の貌のあり
 「命綱を装着して」と言ふ間もなく夫は飛び出で啼を見まはる
 裏山の裾に咲き初む孤花盆が近しと人の懐かし

牧雄彦

あちさるに

・大

ああ五月みどり噴く怪たどりつつ君が今際の姿をおもふ
 いま君は宇宙のいつくを翔びるるや飛ちてひととせ時は過ぎゆく
 びらびらとセキレイが飛ぶ白黒の羽根を夕日に光らせながら
 ヒメチヨラン咲き続く道にながしとほき記憶の甦る道
 川沿ひを歩めるわれを追ひ越して少年の自転車未来へと去る
 今年また去年と同じき庭隅に八重のじふやく咲けり明るし
 あちさるにわがたましひの吸はれしか青の世界を浮きつ沈みつ

松浦 禎子

酒席

・羊

熱中症外に出るなのアナウンスにわれは従う昨日も今日もつのを出す竜神雷神の浮かぶ雲童話の世界へ久方ぶりに角切りのスイカ五ヶほどとめきて納豆に締むひとり酒席暑くとも明日は外出の用事あり猛暑もどうぞひとりで新しくなりし今年のエアコンはわがもの顔に風おくりくる筋肉を鍛えてくれる薬の名歩かない日の広告によむ何もせず朝から晩までゴロゴロとそれでもよいのか今年の夏を

松本多摩子

惨状

・桜

半年の変わらぬ惨状映像に泣く日笑う日営み続く三連休程よい雨でクーラーなし梅雨明け近し酷暑の近し老い感じ口に出す度ぞらそうさ八十だもの一撃される一年生初めて迎える夏休み友と交換手紙も書ける旅したるパリの名所が甦る共に歩きし友は故人に熱風が街を包んで五時過ぎの買物帰り影をひたすら猛暑なりオリンピックの戦いはクーラー唸る部屋に籠もりて

三浦 好博

太陽熱マルチ

・銃

ドボルザーク「アメリカ」に切なき若き日よかの人ももう傘寿過ぎしか海見つつ孫と話しぬ鯨にもお爺さんお婆さんがあること懐かしき妙高山が映りある両膝に灸を据えつつ見をり南無無照金剛の碑に緋りつく絶滅危惧種の蝸牛の二三お疲れさんゆつくりお休み風葬の揚羽をみちの端に移せり西風の強き日あまたの赤とんぼ番ひもその他もみな西を向く太陽熱マルチは川よと畑覆ふ番ひのトンボが卵産みみる

三木 まり

影

・鳥

G線の音は深く胸奥に降りてゆきつつ夕べに響く真つづくに伸びる道のその向こう朝日が昇る歩いて行こう改札を風吹き抜けて行く人と帰り来る人交わらず過ぐ梢だけ切られた大樹されどなお威風堂々 風吹き渡る樹の影に蟻じごく昏く潜りゆき真夏の光と影を集めるふところに七いろの珠を抱く貝を守り歌うか光が戯れたの川流れる先の遙か遙か向こうに光る背い星雲

宮本 靖彦

入院

・俊

入院し独りテレビを眺むれば昔の歌に慰めらるる脱腸を二十年経て再手術今は針穴A1働く器機進めど看護師の仕事増えゆきて早朝に始まり夕六時迄看護師のほほ笑みの好しA1の今も変らぬ入院生活今日正に天神様の船渡御祭病床に坐しテレビ楽しむ雨に笑顔最終船はフランス勢セーヌに開くパリ・オリンピック地図もちて国名辿るも叶はざり世界の代表しぶきに濡るる

三好 聖三

綿の花

・伊

野放図に殖えてあばれるなよ竹を伐り倒しゆく冬の数日ぼたぼたと落ちて腐れる梅の実を除けつつ芥を捨てにゆくなり掛襟を噛んで快楽に耐えている葛飾應為の枕絵の女蝶死せし猫を拾えりバケツもて血糊を流し弾りにゆく知らぬまに四五輪におう綿の花芯暗くしてややに俯く以色列・露西亞・亜米利加・巴里五輪二重規範に塗れて暗し畑から帰れば貰う紫蘇ジュース冷たさは直ぐ心身を貫く

御代田澄江

二週遅れの入梅

・茨

さざれ石敷き詰む中庭散りこぼつ落葉拾ひぬ真白き庭に
常よりも二週遅れの入梅と降りしだく雨に心潤ふ

コープデリバリ配達員と言葉交はすやつと出ましたね入梅宣言
燕たち飛び交ふ空に聞き做せば土喰つて虫喰つてシブイーと鳴く
最高裁「強制不妊は違憲なり」二万五千人の生如何にぞ救ふ
紫陽花と合はせ活けたる野萱草紫と赤の色照り映えぬ
歌会に連れゆきし子の五十年経今吾の手を引きて連れゆく

もとむらしげと

高校生

・そ

わが問いに競いて答えを口にする生徒の多き今年のクラス
我が出すなぞなに子らは集中し初めの五分は黄金の時間
「誰か読む」募ればさつと手が挙がる読める子読めぬ子入り交じりつつ
黒板に問題を書けばすでにして書き込まんと子らは待ちいる
ひしめきて黒板に書く生徒らのチョークの音と語り合う声
まぢがうは大いに良しと励ませば堂々としてまぢがいを書く
黒板に書くは百点まぢがえばプラス二十点と言ひ聞かせおり

桃原佳子

生き線

・沖

雨降りて二日も見ねば苦瓜はフェンスに数多ぶら下がっている
梅雨晴れ間小暗き庭の一隅に茗荷のうすき黄の花の見ゆ
金柑の頂上までも咲き昇りコヒルガオの花咲き満ちている
雑草の強き生き様畑攻める藪枯らしの蔓を切りゆく
夏帽子浅く被りて昇りゆく陽に染まりつつ水を撒きゆく
菜園の五株の苦菜は青々と夕暮れの空に葉を広げおり
テレビから感染しそうな勢いでコロナ十一波は拡散している

横田敏子

夏

・福

この夏は魚になりたし 山奥の清流に棲む山女魚がいいね
そうめんをスーッとすするので元を涼風抜けてゆくような夏
熱風に花は急かされ咲き急ぐテッポウユリもみそ萩も揺れ
ゆうらりと景色の揺れて立ち竦み足を踏ん張る水撒く夕べ
オリンピックの合間に急ぐ厨ごと早も虫の音聞こえてきたり
熱帯夜二十三時にLINEあり「今宵の月は神秘的です」
入院の夫君案じておられるや いつも早寝の友のLINEは

養学登志子

蛍

・俊

夢のよな不思議に出会すことありぬ黄金に寄せる真夜の蛍火
乱舞する蛍の匂いに立ちつくす木の葉草の葉雨夜のひびき
ほうたるのわが肌え擦りぶつかるも狂おしきこと命というか
この夜ふけ山押し寄せてくるのかも蛍の世界に何ぞあらんや
めずらしきこの蛍火の大乱舞かの世の魂もこうゆうものかも
「わが家ではほたるの君って話します」顔見知りのひと車中の話
ほうたるの野はかなたまで養えはててすぐ病院のたつこと知りぬ

山下雅子

十五歳の記憶

・習

しみじみと偲ぶ昭和二十年八月十五日日本敗けたり
天皇のポツダム宣言受託の御声十五歳のわれは忘れず
日本敗けた一声ありしが人ら黙し炎天の静寂すすり泣く声
今夜から電灯つけてよいのかと十五歳のわれの一声
炎天に防空頭巾をほうり投ぐわれは戦時と訣別したり
征きしまの父はいずこに「お父さん」夾竹桃の紅ゆるる
敗戦より八十年の平和なり三元号をわれは生きおり

山野 幸司 馬

・沖

百万の軍馬送りし門司港に今も変わらぬ波立ち始む
船倉に閉じ込められし軍馬らの悲しき声が船内に満つ
輻重兵軍馬と共に生きたりし帰還の船に兵だけが立つ
中国の戦地を歩む軍馬なり君はペガサス戦下に生きる
君は我が命であった軍馬らはいずこに消えし大河を越えて
戦場に馬も死に人も死に行く果てなき道の中国戦線
中国の戦場くぐり生きし父戦後肺病みの唐人町に

山本 孟 文月

・大

文月と呼ばれる日々の猛暑浴び水道水もぬるま湯になる
株上がり円安激し別世界の無職のわれは小松菜しゃきしゃき
思うこと多く残して逝く日まで A-I の智を借りずに生きる
七十代八十代さらに九十代さして変わらぬわたくしがいる
故郷の吉野案内人松谷氏静かな頃の案内かなわす
健脚の農夫然たる風貌よ吉野の美と悲を短歌にたくす
歌会に個性発揮の松谷氏声高くして歌心説く

松 永 智 子 声

・嵐

決断を言ふものでなくみづからの内におのづとはぐくみしもの
幼子の甲高き声舌たらずの声部屋うちに満つる新年
家内にあふれんばかり駆けまはる幼子の声遠く見てゐる
音のなまみゆるのビルの一隅に誰待つとなく空を見て立つ
はれわたる空に浮く雲飛ぶ鳥のかけ見えずただ静寂のとき

久我田 鶴子

尾瀬行

・羊

水面にとろみのついてゐるやうな波の立ちかた燧ヶ岳が揺らぐ
尾瀬の螢つひに今年も見ずじまひ横になればすぐ眠つてしまふ
夜は明けイワツバメの朝 低空を飛び交ひ捕食のこゑの賑はひ
歩くペースつくりてくれるひとのゐる白砂峠沼尻平へ
沼尻より沼のひだりをまはりゆき声を挙げたり ニッコウキスゲ
遅霜に遭ひし去年はまぼろしのニッコウキスゲ今年の花よ
いちめんに見て一輪に近づきて花との距離をたのしみながら

小関茂歌集「宇宙時刻」 点滅社 二〇〇〇円＋税

「小関茂歌集Ⅱ」（地中海叢書第25篇 一九六八年刊）と
「小関茂歌集Ⅲ」（地中海叢書第9篇 一九六六年刊）を底本と
した小関茂歌集「宇宙時刻」がついに刊行されました。

帯文には、「昭和期に活動していた謎多き口語自由律の歌人、
小関茂。生前に追した、不思議な魅力を放つふたつの歌集をひ
とつにまとめて復刻」とあり、乗は p h a ・東直子・町田康の
三氏が執筆しています。

○注文は点滅社（星良朝成氏）まで。

点滅社 184-0013 小金井市前原町五-19-1

アートメゾン武蔵小金井(二〇二)

FAX 042(405)0650

E-mail tennetsusya@gmail.com

今日の二人

ファンファーレ

平山 一子かず

生前に墓石建てて「夢」と彫りお気に入りなりき吾は残されぬ
右利きの仕様にもの統べられてストレス多き左利きかな
何年も雛と一緒に歳をとり簪欠けてもこの雛が好き

捨ててよね看護師の子に言われたり使いしマスクまた洗いたり
野良猫に餌をやるなど回覧板それですべてが解決するかな
型抜きて夫と一緒に作りにき絹ごし豆腐入りのドーナツ
味が濃いと言われても困る調理する私に丁度良いのですから
染色を習いて挑戦したるこれ期待以上のテールブルクロス
アイラインその鋭き目バッチリぞ我が家の猫のメロンのメイク
どうしても逢いたくなって胸キュンとなる時があるいなあなたに
おぼろげな春の月かな今朝我の失敗作の目玉焼きのごと
目覚めたら思い切りグーパー足もする今日の日付を口に出して言う
強い風吹いて一斉にファンファーレ十五個のエンジェルトランペット

赤い糸

赤い糸は本当にあるらしい。お見合の相手は私が13人目と後に知る。彼(A)に上司は「なかなか決まらないね、ひょっとしたら好きな人がいるんじゃないの？」Aは「実は気になる娘がいる」「なあんだ先ずそこを当たってみなければ」と私に話が来た。私の家の真ん前の建物は、豆を選別し機械で磨き上げる工場だった。Aは工場勤務ではないが、バスでの出社前に毎朝工場に立ち寄り工場長と話をしていた。私も同じバスで通勤していた。Aは小樽から来た人と聞いていた。両家の話し合いで、どちらも樺太からの引き揚げ者と知る。私の母が12歳の時、親どうしが決めた許嫁となり、本斗の菅原旅館にいた。その旅館を常宿にしていたのがAの父、もしかしたら、私の母に会っていたかも知れない。そればかりかAの父は、菅原旅館の旅館の長男と共同で船での商いをしていた。樺太から海産物を広島島の尾道へ、船りは酢を運んだと。大正末期から昭和の初め頃の話。因みに私の父は尾道の出だ。とにかく私の事は灯台下暗しだねと言われた。Aは私の夫となり今は遠い天国。もし赤い糸が今も繋がっているのなら、グイグイ手繰り寄せちゃうぞ。

今月の二人

移ろい

中山 誠

春分の山辺ヤマノヘ小道望む夕陽二つの山の間に聞かれぬに染む
 憂うつな梅雨の日続くも紫陽花の目に染む碧あざに気分ほぐさる
 日が沈み民家の明かりポツポツと虫の音かすか秋の日暮れゆく
 元日の真白に染まる朝清し緑にけれぬい門松新鮮
 修験道拓きし行者の思い映える葛城山系仰げば尊し
 古来より新酒生まるれば大物主大神神社おおむすひに奉じ祈りき
 奥能登の年の初めの贈り物暮らしを破壊す大地震とは
 次世代の車の主流はEVイーヴィか水素にハイブリ貴重な強みも
 先進の医学や技術その陰で人災不幸時ときとし見舞う
 青垣の山すそ隠す春がすみ物部もののべ往時が遠く偲ばる
 夕まぐれ坊や手にする線香花火ゆかた姿の姉の顔染める
 葉を落とし明るくなりぬ落葉樹ふかき眠りに芽吹く春まで
 厳寒さえ裸で相撲力士たち元気の源いずこより来る

初心

短歌には以前から関心を寄せていたが、この世界を知らない身には彼方の存在であった。がつい先年、幸運にもその場が与えられ自分流に創作を楽しむこの頃である。

最初は、夜寝床に入って詠むことから始めた。それと、机の前に座して詠んだ。又、乗り物で移動する際や時間を持て余している場合にも詠むようになっていった。

どんな形で詠もうと、さっと仕上がる場合もあるが、これは数少なく、何度も修正を余儀なくされている。出来上がった時は、特に良い作品に仕上がったと思える時は、本当に嬉しい。幸せな気分に含まれる。短歌作りは、心の集中、安らぎ、喜び等を与えてくれる。

また、短歌を詠む人には長寿の人が多く、と聞いている。某大新聞の某女性短歌選者は九十六歳で今なお現役で活躍されていて、そのことを物語っている。人々の希望の灯でもあり、百寿(いや、もっと)まではずっと、と願わずにはいられない。

素晴らしい短歌の世界に導いて頂いた「山櫻の会」主宰の永田進一(先輩)さんには心から感謝申し上げたい。初心を忘れず歌道に精進したい、と思っている。

◆今月の二人・平山一子作品評◆
強い風吹いて一斉に

平山さんは、銚子市在住。「今月の二人」には、二度目の登場である。

・何年も雛と一緒に歳をとり簪欠けてもこの雛が好き

毎年、雛祭りには雛を飾っているのだろう。一緒に歳をとったと言えるくらいに馴染んでいる雛。いつの間にか簪がなくなっているけれど、やっぱりこの雛が好きだと言う。

・型抜きて夫と一緒に作りにき絹ごし豆腐入りのドーナツ

この歌の「一緒に」の相手は、夫。「作りにき」と過去形になっているのは、ドーナツと一緒に作った日の夫を偲んでいるのである。絹ごし豆腐入りのドーナツは、柔らかかそうだ。

・捨ててよね看護師の子に言われたり使いしマスクまた洗いた

り
使い捨てのマスクではなく、布製のマスクなんだろう。何度も洗っては使っている母に、看護師の子は「捨ててよね」と言う。そう言われてもね、と平山さんはまたマスクを洗うのだ。この親子関係、なにか微笑ましい。

・どうしても違いたくなって胸キュンとなる時があるいなあ
なたに

赤い糸で結ばれていた夫は、今は亡き人。でも、どうしても違いたくなる時があると言う。口語の表現が素直な気持ちを感じていて。結句は、少し甘くなりすぎたかな？

・強い風吹いて一斉にファンファーレ十五個のエンジェルトラ
ンペット

詩的なこの勢い。若々しい感覚が素晴らしい。

◆今月の二人・中山 誠作品評◆
葉を落とし明るくなりぬ

評者・久我田鶴子

中山さんは、奈良県香芝市在住。山辺の道も、大神神社も葛城山系も日常と地続きのところにあるようだ。

・春分の山辺小道望む夕陽二つの山の間に染む

山辺の道から望む夕景。夕陽が二つの山の間に染むように染めているという。秋の夕暮れでなく、春の夕暮れもなかなか美しいと思われたにちがいない。

・日が沈み民家の明かりポツポツと虫の音かすか秋の日暮れゆ
く

こちらは、秋の日の暮れ。この時も、大和の道を歩いていたのだろうか。初句で「日が沈み」、結句でまた「秋の日の暮れゆく」と重なっている。どちらかを生かしては？

・古来より新酒生まるれば大物主大神神社に奉じ祈りき

三輪山が御神体の大神神社。酒の神として尊崇され、その歳の新酒が奉納される。古来より続く人々の慣わしに感応している中山さんがいる。歴史に連なる生活が今も息づいている。

・次世代の車の主流はEVか水素にハイブリッド貴重な強みも

中山さんの目は、次世代にも向けられている。「ハイブリッド」とあるのは、「ハイブリッド車」。「貴重な強み」とは、具体的にはどんなことなのだろう。

・葉を落とし明るくなりぬ落葉樹ふかき眠りに芽吹く春まで

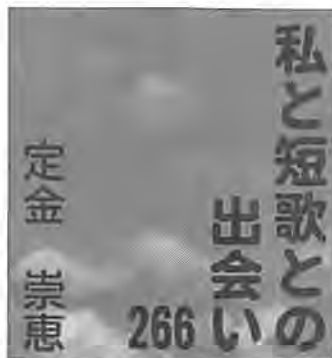
「葉を落とし明るくなりぬ」と、ここで切ったところが良い。具体的に木の名を入れるとか、雑木林のようなところであればその雰囲気が出るようにしてみてもどうだろう。

学生時代から山歩き、デンマーク体操とスポーツ好きだった私と短歌が結びつくなって思いもよらないことでした。山で出会った花の可憐さ、自然の厳しさに耐えるけなげさに魅せられ山への思いが深くなりました。また体を動かすことにより心も柔軟になり自分を見つめることが出来たのではないかと思います。そんな私の生活の中に短歌への芽が育まれたのは自然なことだったのかも知れないと今は思います。高校時代に幼なじみが群馬の短歌結社に入り、活字になる友の歌を毎月目にしていたことも短歌への親しみにつながったようです。

三十一文字を組み立てるなんて夢の世界のことでしたが、転機は定年の時でした。長年の多忙な日々から解放され、ほっとすると同時に寂しさを感じた時に、短歌にあるとされる自分がいました。職場としていた学園の同窓生の短歌会に入会しました。初心者の私でしたが、ランチ会、吟行と名付けた小旅行等、楽しい雰囲気の中で歌作りを始めました。

また、ゆっくりと過ごす日々はふるさと
の文化活動にも向き合うことにつながり、
地元の「鴨方短歌会」に参加し短歌の基礎
を教わりました。その会のお世話をして下
さる設楽まゆみさんのお誘いで、平成21年
「地中海」に入会しました。倉敷船穂在住

の小山宜子先生の「詩織グループ」に所属し、私の短歌にも新しい道が開かれた気がします。小山先生の短歌に対する女性らしい感性や、びしびしと迫ってくる率直な発言にひかれ、毎月の添削をわくわくしながら待ちました。先生の赤ペンの文章を何回も読みながら読み返しました。船穂のメンバーが少なくなり、やがて先生と二人だけ



の会になりましたが、時にご自宅を訪れ直接の指導を受けることもありました。生き方のお話にも短歌への奥深い思いを感じとりました。お帽子や洋服を見せていただきました。おしゃれ談義を楽しむこともありました。いつまでも平易な生活詠で上達することのない私の短歌に先生はやきもきされたことと思います。

先生が体調を崩され、平成28年8月号で詩織グループは閉じられました。その節は小山先生と親しい方々の励ましをいただき、「地中海」の温かさをしみじみ感じました。ひき続き久我編集長の羊グループに入れていただき、今に至っております。

私の短歌は「徑」をよく詠みます。来し方、明日に続く徑。花・樹・鳥などの自然との出会いの徑に短歌の基がひそんでいます。毎日歩く公園にも四季折々の訪れがあり、行き交う人とのあいさつにいやされ、車窓を流れる風景から短歌が生まれます。言葉の引き出しは少なく、心の琴線にふれる歌は詠めませんが、短歌をつくらうという思いが日々の生活に彩りをそえてくれます。なにげない夕食の一品が歌の材料になり、ひとりの食が晴れやかになります。

この原稿依頼を受け、私と短歌のつきあいをあらためて思い出しました。初めの頃の歌は拙い表現でも、新しいことに挑戦する喜びとエネルギーがありました。これからの私の短歌にも、このエネルギーこそ大切なものです。

人生の最終章に近づいていますが、いつまでも私らしい徑を歩いて行きたいものです。そのためにも短歌をつくる気力を大きな支えとして過ごしたいと思います。